

博士論文（要約）

論文題目 フッサール初期・中期志向性理論における意味と対象

氏名 富山 豊

目次

1	序論	3
2	いくつかの予備的考察と問題の定式化	8
2.1	作用と志向的对象	8
2.2	David Bell の志向性解釈	11
2.3	無対象表象の問題と同一性の問題	16
3	フレーゲの意味論と初期志向性理論	19
3.1	フレーゲの意味論	19
3.2	フッサールの志向的对象概念と意味論的値	23
3.3	モデル論的論証と対象言語／メタ言語の区別	30
4	志向的「対象性」概念の広がり	33
4.1	普遍者と抽象体	33
4.2	対象としての事態	39
4.3	意味概念の二義性	46
5	作用の時間性格	55
5.1	ダメットのフッサール批判	55
5.2	把握の理論における出来事的契機と作用概念の解釈	61
6	対象の超越性と意味の透明性	67
6.1	序	67
6.2	対象への関係と対象の超越性	67
6.3	存在論的な基準による区分の不可能性	67
6.4	超越性の実質	68
6.5	ヒンティッカの「内包性」テーゼ	69
6.6	内包性テーゼの難点	70
6.7	解決への指針	71
6.8	透明性要求からの諸帰結	72
6.9	結び	74
7	初期志向性理論の理論的特徴と歴史的特徴	75
7.1	フッサール初期志向性理論はどの程度まで「实在論」か	75
7.2	志向性の哲学史におけるフッサール初期志向性理論の位置	83
8	中期志向性理論へ	91
8.1	意味概念の動揺	91
8.2	意味論的値としてのノエマ	100

8.3	対象としてのノエマ	104
9	これまでの議論の存在論的帰結とダメットの反実在論	112
10	結語	114

すでに出版契約がされており、契約内容により、インターネット公表に対する許諾が得られていないため、全文公表できない。

富山 豊『フッサール そこにないものへ向かう思考（仮）』青土社、2021年刊行予定

文献表

1. *Husserliana* Gesammelte Werke

Husserliana III/1, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, 1. Halbband: Text der 1.-3. Auflage, Karl Schuhmann (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1976

Husserliana XVIII, *Logische Untersuchungen, Erster Band. Prolegomena zur reinen Logik*, Elmar Holenstein (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1975

Husserliana XIX/1, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band. I. Teil. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Ursula Panzer (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1984

Husserliana XIX/2, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band. II. Teil. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Ursula Panzer (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1984

Husserliana XXII, *Aufsätze und Rezensionen (1890-1910)*, Bernhard Rang (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1979

Husserliana XXVI, *Vorlesungen über Bedeutungslehre. Sommersemester 1908*, Ursula Panzer (ed.), Martinus Nijhoff Publishers, 1987

2. *Husserliana* Materialienbände

Husserliana Materialienbände 1, *Logik. Vorlesung 1896*, Elisabeth Schuhmann (ed.), Kluwer Academic Publishers, 2001

3. Secondary Writings

John E. Atwell, "Husserl on Signification and Object", 1969, reprinted in Mohanty, 1977

David Bell, *Husserl, The Arguments of the Philosophers*, Routledge, 1990

Paul Benacerraf, "Mathematical Truth", in Benacerraf & Putnam, 1983, pp. 403-420

Paul Benacerraf & Hilary Putnam (eds.), *Philosophy of Mathematics: Selected Readings*, second edition, Cambridge University Press, 1983

Jocelyn Benoist, "Phenomenological Approach to Meaning (II): State of Affairs and Situations", in Okada, 2008, pp. 25-94

Rüdiger Bubner & Konrad Cramer & Reiner Wiehl (eds.), *Hermeneutik und Dialektik, Aufsätze II Sprache und Logik, Theorie und Auslegung und Probleme der Einzelwissenschaften*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1970

Stefania Centrone, *Logic and Philosophy of Mathematics in the Early Husserl*, Springer, 2010

P. M. Cohn, *Basic Algebra: Groups, Rings and Fields*, Springer-Verlag, 2003

- Theodore de Boer, *The Development of Husserl's Thought*, Phaenomenologica 76, Theodore Plantinga (trans.), Martinus Nijhoff, 1978
- John Drummond, *Husserlian Intentionality and Non-foundational Realism*, Kluwer Academic Publishers, 1990
- Michael Dummett, "Frege's distinction between Sense and Reference", in Dummett, 1978, pp. 116-144
- Michael Dummett, *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press, 1978
- Michael Dummett, *Frege: Philosophy of Language*, second edition, Harvard University Press, 1981
- Michael Dummett, "Thought and Perception: The Views of Two Philosophical Innovators", in Dummett, 1991a, pp. 263-288
- Michael Dummett, *Frege and Other Philosophers*, Clarendon Press, 1991a
- Michael Dummett, *The Logical Basis of Metaphysics*, William James lectures: 1976, Harvard University Press, 1991b
- Michael Dummett, *Origins of Analytical Philosophy*, Harvard University Press, 1993a
- Michael Dummett, "Frege and Husserl on Reference", in Dummett, 1993b, pp. 224-229
- Michael Dummett, *The Seas of Language*, Clarendon Press, 1993b
- Michael Dummett, *Truth and the Past*, Columbia University Press, 2004
- Michael Dummett, *Thought and Reality*, Clarendon Press, 2006
- Herbert B. Enderton, *A Mathematical Introduction to Logic*, second edition, Harcourt Academic Press, 2001
- Gareth Evans, *The Varieties of Reference*, John McDowell (ed.), Clarendon Press, 1982
- Jakko Hintikka, *The Intentions of Intentionality and Other New Models for Modalities*, Reidel, 1975
- Nicholas Jolley, *Leibniz*, Routledge, 2005
- Jay Lampert, *Synthesis and Backward Reference in Husserl's Logical Investigations*, Phaenomenologica 131, Kluwer Academic Publishers, 1995
- Azriel Levy, *Basic Set Theory*, Dover Publications, 1979
- Hermann Lotze, *Logik*, Philosophische Bibliothek 141, Felix Meiner, 1928
- Eduard Marbach, "Noematic Intentionality", in *The Phenomenology of the Noema*, Kluwer Academic Publishers, 1992
- Jitendra Nath Mohanty (ed.), *Readings on Edmund Husserl's Logical Investigations*, Martinus Nijhoff, 1977
- Richard T. Murphy, *Hume and Husserl: Towards Radical Subjectivism*, Phaenomenologica 79, Martinus Nijhoff, 1980
- Mitsuhiro Okada (ed.), *Interdisciplinary Logic*, 1, Keio university, 2008
- Dag Prawitz, *Natural Deduction: A Proof Theoretical Study*, Dover Publications, 2006
- Robin D. Rollinger, *Meinong and Husserl on Abstraction and Universals: From Hume Studies I to Logical Investigations II*, Rodopi, 1993
- Karl Schuhmann, "Husserl's Abhandlung "Intentionale Gegenstände" Edition der ursprünglichen Druckfassung", *Brentano Studien*, 3, 1991, pp. 137-176
- Peter Simons, "Meaning and Language", in Barry Smith et al. (eds.), 1995, pp. 106-137
- Barry Smith & David Woodruff Smith (eds.), *Cambridge Companion to Husserl*, Cambridge University

Press, 1995

David Woodruff Smith & Ronald McIntyre, *Husserl and Intentionality: A Study of Mind, Meaning, and Language*, Reidel Publishing Company, 1982

Robert Sokolowski, *The Formation of Husserl's Concept of Constitution*, Kluwer Academic Publishers, 1970

Robert Sokolowski, *Introduction to Phenomenology*, Cambridge University Press, 1999

A. S. Troelstra & H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory*, second edition, Cambridge University Press, 2000

Ernst Tugendhat, "Phänomenologie und Sprachanalyse", in Bubner et al. (eds.), 1970, pp. 3-23

Ernst Tugendhat, "The Meaning of 'Bedeutung' in Frege", *Analysis*, 30. 6, 1970, pp. 177-189

Dirk van Dalen, *Logic and Structure*, third edition, Springer-Verlag, 1994

Bernhard Weiss, *Michael Dummett*, Philosophy Now, Princeton University Press, 2002

Dallas Willard, "The Paradox of Logical Psychologism: Husserl's Way Out", in Mohanty (ed.), 1977, pp. 43-54

Dan Zahavi, *Intentionalität & Konstitution: Eine Einführung in Husserls Logische Untersuchungen*, Museum Tusulanum Press, 1992

Dan Zahavi, *Husserl's Phenomenology*, Stanford University Press, 2003

飯田隆, 『言語哲学大全 I 論理と言語』, 勁草書房, 1987

飯田隆, 「言語とメタ言語」, 『現代思想』 26-1, 1998, pp. 78-89

飯田隆, 『言語哲学大全 IV 真理と意味』, 勁草書房, 2002

鈴木俊洋, 『数学の現象学: 数学的直観を扱うために生まれたフッサール現象学』, 法政大学出版局, 2013

富山豊, 「フッサール初期志向性理論における「志向的对象」の位置」, 『フッサール研究』(電子ジャーナル/URL: <http://husserl.exblog.jp/>), フッサール研究会, 7, 2009a, pp. 61-72

富山豊, 「初期フッサールにおける事態論」, 『論集』 27, 2009b, pp. 252-265

富山豊, 「フッサール『論理学研究』における「意味」のイデア性について」, 『論集』 28, 2010a, pp. 104-117

富山豊, 「初期・中期フッサールにおける意味概念の動揺」, 『現象学年報』 26, 2010b, pp. 127-134

富山豊, 「フッサール『論理学研究』における「対象」の超越性について」, 『論集』 29, 2011, pp. 105-118

富山豊, 「フッサール中期志向性理論におけるノエマと地平の意義について」, 『現象学年報』, 日本現象学会, 29, 2013, pp. 141-148

富山豊, 「フッサール初期志向性理論はどの程度まで「実在論」か」, 『哲学雑誌』, 哲学会, 128 巻 800 号, 2013, pp. 158-175

富山豊, 「フッサール中期志向性理論における「対象」の同一性と「ノエマの意味における規定可能な X」」, 『哲学』, 日本哲学会, 第 65 号, 2014, pp. 242-256

富山豊, 「受容性と志向性: 志向性の哲学史におけるフッサールの功績は何処にあるのか」, 『フッサール研究』(電子ジャーナル/URL: <http://husserl.exblog.jp/>), フッサール研究会, 11, 2014a, pp. 27-37

富山豊, 「「数学的直観」概念の眼目とフッサールの「直観」概念」, 『MORALIA』, 東北大学倫理学研究会, 20-21 合併号, 2014, pp. 233-251

中畑正志, 『魂の変容: 心的基礎概念の歴史的構成』, 岩波書店, 2011

中畑正志, 「志向性と意識——プレクターノをめぐる覚書——」, 『フッサール研究』(電子ジャーナル/URL: <http://husserl.exblog.jp/>), フッサール研究会, 12, 2015, pp. 132-148

- 長沼淳, 「志向的对象とはなにか」, 『現象学年報』, 15, 1999, pp. 249-261
- 貫成人, 『経験の構造: フッサール現象学の新しい全体像』, 勁草書房, 2003
- 野家啓一, 「フッサール現象学の臨界——「意味論的還元」から「解釈学的還元」へ——」, in 野家, 1993, pp. 83-146
- 野家啓一, 『無根拠からの出発』, 勁草書房, 1993
- 廣松渉, 『フッサール現象学への視角』, 青土社, 1994
- 松田毅, 『ライブニッツの認識論』, 創文社, 2005
- 三上真司, 「フッサールと实在論の問題 (III)」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』, 第 49 巻第 1 号, 横浜市立大学学術研究会, 1998, pp. 71-116
- 村田純一, 「世界内存在としての意識: 志向性の哲学と現象学」, 『フッサール研究』(電子ジャーナル/URL: <http://husserl.exblog.jp/>), フッサール研究会, 11, 2014, pp. 1-26
- 横内寛文, 『プログラム意味論』, 情報数学講座 7, 共立出版, 1994

内容の要旨

十年ぶりに訪れたキャンパスの並木を歩く。鮮やかな緑、幹を覆う茶色のグラデーション、木漏れ日の煌き、舗装されたタイルの配色。歩みを進めるにつれて様々な色彩が視界の中を移り変わっていく。輝く緑の美しさに眼を細め、皺の刻まれた樹皮に懐かしさを感じ、擦れ合う葉のざわめきに賑やかだった学生生活を思い出す。何気なく並木を歩む些細な経験においてさえ、幾多の色彩、音、感情、記憶、思考がそこに現れては消え、さまざまな印象が移り変わっていく。

現象学の仕事は、こうした我々の経験をそれが我々に「現」れるがままに忠実に記述することであるとまずは言うことができる。経験の中で現れてくる様々な「現象」、その経験を現象学は記述する。では現象学者の仕事とはこうした移り変わる感覚や感情をその現れては消えていくままに時系列的に記録していくことなのだろうか。「緑、黄緑、茶、黒、白、ざわざわ、また緑、美しい、茶、灰、懐かしい」というように。「まず緑が見えました、美しかったです。茶色の皺が見えました。懐かしいと思いました。」という記述をただ並べていくだけであるならば、現象学者はまるで夏休みの絵日記を書く小学生のようなものになるだろう。しかし、現象学者がいう経験の記述とはこのようなものではない。

現れては消える色彩や音は、単に漫然と流れていく「感覚の狂想曲」ではない。これらはただ雑然と散らばって流れていくものではなく、緑は葉の色として、茶は幹の色として、美しさは葉の緑についての経験の一部として、懐かしさは幹の樹皮に刻まれた皺についての経験の一部として、それぞれが何についての経験なのかという仕方でもとまりを成し、組織化されている。もし同じタイミングで同じ感覚や感情が流れていく経験をしたとしても、樹皮の皺を懐かしいと思う経験と、同時に聴こえていた葉のざわめきを懐かしいと思う経験とでは異なる経験をしたと言うべきだろう。我々の経験は、単にばらばらに流れていく感覚や感情の羅列ではなく、それぞれが特定の何かについてのものである。美しさの印象は何かについてそれを美しいと思う評価の中で現れ、緑の感覚は何かについてそれが緑色をしているという知覚の中で現れる。我々の経験がもつ、それぞれが特定の何かについてのものであるというこの性格を(それぞれが何らかの仕方でも何らかの対象に向かっていくという意味で)「志向性」と呼ぶ。すると、我々の経験の内容、我々がどういうことを考え、想像し、知覚し、思い出し、望み、憎み、予想しているのかというそのつどの経験の内容がどのようなものであるのかを特定するには、その経験が何についてどのような仕方でも経験する経験となっているかという、その志向性の構造を分析しなければならないだろう。現象学の課題となる経験の記述とは、何よりもまずこの志向性の構造を明らかにすることであり、単に雑然と流れていくそのつどの個々の印象を記録していくだけの絵日記ではない。

本稿は、この「志向性」に関して現象学の提唱者であるフッサールがとりわけその初期から中期において展開した志向性理論の内実を明らかにしようとするものである。我々の

経験が、どのようにしてこの世界に存在する様々な「対象」に関わっているのか、それらについての我々の「認識」というものがいかにして成立しているのか、こうした問題設定は、哲学の歴史において「認識論」の表題の下で語られて来た。しかし同時にフッサールの志向性理論は、「認識論」とはある面では対照的に考えられて来た「存在論」、ないし「形而上学」の圏域においても、ある特有の含意を持つことを後に示すことになるだろう。本稿の課題をより具体的に記しておこう。多くの論者が指摘するように、我々の経験は閉じられたカプセルのような「主観」ないし「意識」の殻の中でただ雑然と流れ去っていくだけの感覚や印象や感情の狂想曲ではない。我々の経験は、何らかの「対象」、あるいは「客観」についての経験であるという仕方で、「志向性」の働きによって組織化・構造化されている。だが、同時に我々の意識において生起する様々な心的作用でもあることも確かであるように思われる。こうした我々の経験は、いかにして志向性を持ち、いかにして客観についての経験であると正当に言われることが出来るのか。本稿の課題は、この問いに対してとりわけ初期から中期における志向性理論の展開の中でフッサールが与えた答えを正確に取り出すことにある。その上で、先に予告したように、我々の経験する世界の在り方についてのある意味で「存在論」的と言える事柄をどのように考えるべきかについての興味深い示唆を取り出すことが出来たならば、本稿の目標は達成される。

とはいえ、「志向性」という名称はフッサール研究においてはやはり中心概念のひとつであり、これまでの多くの研究が多かれ少なかれ、また陰に陽に、何らかの形で取り組んで来た問題でもある。だが、過去のフッサール研究の中には、第二章で触れる Bell のように、志向性が客観的世界の中の実在の対象に向かうものであり、志向的对象の分析とはまさに対象そのものの分析であるという肝心の点を取り逃しているものもある。

これに対して、Sokolowski のような論者は、志向性が意識の内部という閉鎖的な領圏の中に閉じ籠もるものではなく、むしろ外的な世界へと初めから本質的に開かれたものであることを適切に強調する(Sokolowski, 1999)。だがこうした論者も多くの場合、志向性がどのようなものでないか、その特長を語るばかりで、いかにしてそのような志向性の構造が成立するのか、志向性の構造がそのようなものであることは対立する諸理論に対していかなる仕方で説得的に論証することが出来るのかについては、必ずしも議論を尽くしているとは言い難い。彼らは、そうしたいくつかの望ましい性格を持つ志向性というものを所与として、それを使って様々な諸現象を分析することの方に重きを置いている。だが、そもそも志向性の構造が成り立っているということはいかなることなのか、そうした構造は我々の経験の中にいかにして成立してくるのか、あるいは、志向性がそうした性格を持ったものとして成り立っていると考えべき理由を、既にフッサールの教説を受け容れているのでないような人々にいかにして説得的に示してみせることが出来るのか。本稿は、彼らの議論の手前に前提されているこうした基礎的な問いを、もう少ししつこく問い返してみたいのである。

こうした問題を明らかにするために、第一章の序論においてこうした志向性概念の眼目

を一般的な形で概略的に描き出し、続く第二章以降でフッサールの志向性理論を主題的に論じていく。まず第二章ではフッサールの「作用」概念と「志向的对象」概念の概観を得る。ここでのポイントは、志向性、とりわけ志向的对象がいかなる意味で我々の経験の記述にとって本質的であるのかを確認すること、そしてその志向性の成立を説明する理論がいかなる困難に直面するのかを見ることにある。続く第三章では主として 20 世紀の後半に活躍した分析哲学の重鎮マイケル・ダメットの定式化に基づくフレーゲの意味論の枠組みを提示し、それを参照軸として『論理学研究』に代表されるフッサールの初期志向性理論の枠組みを再構成する。ここで鍵概念となるのはダメットの提案した意味論的値の概念である。第四章ではフッサールの志向的「対象性」概念の広がりを検討し、それを踏まえて作用の「意味」概念の二義性を確認する。フッサールの「対象」ないし「対象性」の概念は高次対象性である事態や普遍者、抽象体などを含む広い概念であり、とりわけ普遍者と抽象体の区別は作用の「意味」概念の理解にとっても本質的であることが示される。続く第五章では意味概念の二義性を元に作用の時間性格を確認し、第六章ではそこまでに確認された意味概念に対して「対象」概念の超越性を改めて論じる。第七章ではそれまでに確認された初期志向性理論の枠組みを別の角度から俯瞰的に捉え直す。すなわち理論的な観点からはここまでに確認されたフッサールの初期志向性理論がどの程度まで「实在論」的な描像となっているかという視点からその理論構造を検討し、歴史的な観点からは志向性を受容性から捉える伝統との距離という視点から初期志向性理論を志向性の哲学史の中に位置づける。第八章では初期志向性理論の精緻な枠組みになお潜むいくつかの困難の種を指摘し、『イデー』第一巻に代表されるフッサールの中期志向性理論の形成への動因を探り、それを踏まえて中期志向性理論のとりわけノエマ概念がもつ特質を検討する。終章ではこうした志向性理論を経験の理論として真に受けることによってどのような存在論的含意が汲み取れるかを論じたい。